

自己否定の文明と自己肯定の文明

安田喜憲

一、“物づくり”から“人づくり”の時代へ

戦後五十年、日本はアメリカを模範とし、追いつけ追い越せでがんばってきた。アメリカという目標に近づくためのルールがはっきりと見えていた。そんな時代には、問題解決型の秀才が大きな力を発揮できた。既存のものをより便利に、より早く、より安く、より高品質に作り直せばことたりた。物づくりのみではない社会の制度もアメリカを模範として、アメリカ型民主主義社会を目標にして大量生産・大量消費の社会システムを構築し

てきた。

それは人間の育成においても同じだった。幼い頃から塾に通い、既存の与えられた問題をいかに早く正確に解くかに全力が投入された。そして、おそらく強烈な自己否定など体験することなく、既存の問題解決にすぐれた秀才が受験戦争の栄光をかちとり、日本のリーダーとなった。模範とすべき対象があり既存のルールが存在する間は、こうした問題解決型の秀才・翻訳型の秀才は大きな力を発揮できたのである。

しかし、いつしか日本は、アメリカやヨーロッパに肩

をならべるまでに発展した。もはや模範とすべき対象はなくなってしまう。自分で自分のルールを敷いていかなければならなくなった。

しかもそのルールを敷く先の二十一世紀は、地球環境問題、人口爆発、食糧危機そして高齢化と、多くの難問の山積する嵐の時代である。しかも、これらの難問には正解は予定されていない。これからは何の航海図もなしに、この嵐の海に日本丸は船出しなければならないのである。日本は独自にその航海図を作成しなければならぬ立場になっていたのである。

目標とする対象が消えた今、それでは日本独自の航路とは何なのかを考えようとした時、ふと自らの足元を見ると、日本人はいつたい自らが何者なのか、何のために金もうけしてきたのか。日本国家のアイデンティティーとは何なのかさえわからなくなっていたのである。

それは当然のことである。戦後五十年の間、日本は国家のアイデンティティーはおろか、日本文化の核となるものは何なのかということにたいしてさえ、ほとんど関心を示してこなかったからである。戦後五十年間は、国

家と民族のアイデンティティーを急速に喪失した時代であつたと言えるだろう。

そしてここにいたって、日本を担う問題解決型の秀才の限界が見えてきた。与えられた問題、しかもいつも、正しい解答が予定されている問題の解決にばかりとりくんできた人間にとっては、まったく新しい問題を自らが創造し、模範解答のない白紙の上に新しい航海図を作成することは、かならずしも得意とするところではなかったのである。既成の枠組をはずれることなく予定された正しい解答にたどりつく訓練ばかりを行ってきた人間は、まったく未知の新しい世界を大胆に創造するという冒險心と創造性を失ってしまったのである。

戦後五十年間は、豊かさを求めて、“物づくり”に適進した五十年だった。そこでは人間もまた豊かさを生み出すための一つの歯車にすぎなかった。これからの五十年は、真に創造的な日本人を育成する“人づくり”の時代となろう。未知の荒海にしっかりとした航路を敷くことができるような最澄や空海型の創造性豊かな天才型の人材の育成を目ざさなければならない。“物づくりの時

代”から“人づくりの時代”へと時代の流れを大きく転換させていく必要がある。その時、宗教のもつ重要性が再び注目をあびはじめたのである。

二、自分史のなかの宗教

私は大学受験に失敗したおちこぼれである。郷里の三重の田舎から私と従兄の二人が京都の大学を受験した。従兄はみごとにパスしたが、私は落ちた。小さな田舎のこととて、近所の人々の目も気になったが、なによりも父母の期待にこたえることのできなかった自分がなさけなかった。それから数年の間、私は強い自己否定に陥った。自分はダメな人間だ。何をやってもうまくいかない。どうして人並の親孝行さえできないのか。自分の能力のなさを感じながら自信のない日々を送った。

そんな時、神仏に救いを求めたくなるのは人の常であろう。私は仏教書を読んだ。その時、最澄の「入山釈文」の「愚中ノ極愚、狂中ノ極狂、塵禿ノ有情、底下ノ最澄」の一文に出会った。自分は愚か者の極であり、気の狂った人間の極であり、うすぎたない人間の最低の人

間だというのである。

この一文は十九歳の最澄が出家し、比叡山の山中に草庵をかまえ修行の生活に入った頃に書かれたものである。その頃、最澄は自己否定の極限をさまよっていたのである。あの比叡山を開山し、天台宗の基礎を築いた最澄においてさえ、自分がダメだと思った時があったのだということを見えて、何か魂が救われた思いだった。

しかし、この最澄の強い自己否定こそが、後に天台本覚論の「山川草木国土悉皆仏性」を天台宗の根本理念とするという思想の原点になったと思うのである。

なぜ強い自己否定が、人間のみでなく人間以外の山や川や草木にいたるまであらゆるものが仏になれるという教えを導びいたのか。なぜなら強い自己否定とは、自らの小ささを認識することであるからである。この広大な宇宙そして多様な生命世界の中で、自分という存在は何と小さい、とるにたらない存在なのかという認識なしには、「山川草木国土悉皆仏性」を真に実感することはできない。

最澄とともに平安仏教の旗手となった空海もまた、多

感な青春時代に強い自己否定に陥っていた。空海は郷里の讃岐国弘田郷から父母の期待を一心に背負って七八八年長岡京にのぼり、やっと大学に入学した。しかし七九一年、十八歳の空海は、突然大学を中退し、山中の修行に入るのである。そして、その頃の空海の気持が「三教指帰」に述べられている。

「老親瞞瞞として冥壤に臨み近づけり、比の余が頑頑たる、哺を反す由し無し。嗟呼、悲しき哉。進むで仕へむと欲すれば、己に竿を好む主無し。退いて黙せむと欲すれば、禄を待つ親有り。進退の惟れ谷まれるを歎き、起居の狼狽に纏る。」

（私が愚鈍なため、父母に恩を返す方法がない。月日はすぎ去り、親の命は残り少ない。進んで仕官しようとしても、私を雇ってくれる主人はいないし、黙って何もしないでいると、私の禄を待っている親がいる。ここに私の進退はきわまり、いてもたってもいられない思いにただただうばいするだけである）

この「三教指帰」の中に仮名乞児の名をかりて書かれた一文は、自己否定に陥った多感な青春時代の空海の真の気持であったにちがいない。

そしてこの空海もまた最澄と同じく、紀伊半島や四国の海岸で修行にあけくれ、自己否定に陥った自らの魂をいやし、そして、自らの生きるべき道を模索したのである。自己否定の極限をさまよった空海や最澄を救ったのは、日本の森と海であったのである。

本来人間とは罪深い存在である。その強い自己否定から脱却するために、人々は修行し、そのきびしい修行の中から悟りをひらき、新たな宗教が生れたのではあるまいか。偉大な宗教家はいずれも強烈な自己否定の持主ではなかったかと思うのである。

自己否定はまた古来、日本人が持っていた日本文化の根幹を形成するものでもあった。自己否定を自らの文明の中にきっちり受け取めているのは、日本人であるといつても過言ではあるまい。

三、見つめられる目

自分は小さな存在にすぎないという自己否定の気持は、たえず何かに見つめられているという気持とも直結する。広大な宇宙のかたから、あるいは深い森の中か

ら、あるいは大海原のかなたから、自分をじっと見つめる目を感じる。その目は神や仏の目なのである。古代の人々はそうした大自然の目を、神や仏として感じ折ったのである。大自然の神々によって自らがじっと見つめられていることを感じるができる人によってのみ、新たな宗教への発心の道が開かれているとも言えるのである。それは自分の小ささを認識することなくして、神や仏の光を感じることはできないことを物語っている。

私は今、中国の揚子江流域に五千年前に発展した長江文明の研究にとりこんでいる。五千年前、長江流域には稲作を生業の基盤とした文明が存在したのである。その長江文明を特色づけるのは玉器である。浙江省良渚遺跡から出土した琮とよばれる玉器には、図1のような神獣人面紋様が彫られている。揚子江ワニをデフォルメしたといわれる怪獣の中でもっとも強調されているのが目である。五千年前の人々はこの怪獣の目に見つめられることに畏敬の念をいだいたのである。

さらに時代がくだって三七〇〇年前の四川省三星堆遺跡からは図2に示すような目のとびだした奇怪な青銅製



図1 5000年前の中国浙江省良渚遺跡から出土した玉器に彫られた神獣人面紋様

のマスクが大量に発見された。この目は、朝太陽が昇る時突出し、夕方、太陽が沈むとともにひっこむという。このように長江流域の人々が目に異常なまでにこだわったのは、目は人間の体の中でもっとも弱くて最も大切なところであるだけでなく、目は命の根源を司さるところだからである。人間は死ぬと瞳孔が開く。一昔前までは、お医者さんは、この瞳孔を見て、死の判定を下した。

そしてこの人間にとって一番大切な命の根源を司さる目が、神においてももっとも強烈な力を発揮するところと古代の人々が考えたのは当然の帰結であろう。

同じような世界観は日本の縄文時代の土偶(図3)にもみとめられる。なぜ縄文人は顔の中で目だけを異常に強調したのか。それは目こそが生命の再生と循環を司さる命の根源であり、神々の力がそこに凝集していると考えたからにはかならない。

そして、この雑誌の主宰者である創価学会の会員の人々がもっとも崇敬する日蓮聖人もまたこの目の重要性を説いている。それは、縄文時代以来、日本人の中に



図2 3700年前の四川省三星堆遺跡から出土した青銅製のマスク



図3 3000年前の青森県亀ヶ岡遺跡から出土した縄文時代晩期の遮光器土偶

クの目は、朝、太陽が昇るとともに飛び出し、夕方、太陽が沈むとひっこんだ。古代の人々は太陽は朝生れ、夕方には死ぬと考えた。同じように森もまた春には若葉が芽吹き、夏の青葉、秋の実りの季節をへて冬には死ぬ。しかし、再び春には若葉が吹き、宇宙と大自然は、永劫の再生と循環をくりかえしている。

三星堆遺跡のマスクの目が朝には飛び出し、夕方にはひっこむけれども、再び翌朝には太陽と同じように生れかわる。古代の人々はその神々の目に命の再生と循環を願ったのである。永劫の再生と循環をくりかえす宇宙と大自然に歩調をあわせながら、命の再生と循環を願う気持が、巨大な目の像を作ったのである。そして、その命の再生と循環を支配しつめる神々の目を、古代の人々ははつきりと認識していたのである。

東アジアの稲作文明を基本とする日本や中国そして東

永々と受継れた日本人の心性の根源から発した教えであったとみなすことができる。日蓮は、目に注目することによって、神や仏に見つめられていることを感じることの大切さ、自らの小ささを認識する自己否定の大切さを説かれたのだと私は思うのである。

そしてこの目にこだわる思想もまた森の思想であるといっても過言ではない。四川省三星堆遺跡の青銅のマス

南アジアの国々には、今でもこうした自己否定の文明の伝統が受継がれているといつてよいであろう。

四、自己肯定の文明

この自己否定の文明の対極にあるのが、自己肯定の文明である。自己肯定の文明をもっとも端的に表現しているのが「我思う故に我あり」という有名なデカルトの言葉である。西洋人に足を踏まれて痛いというと、君が僕の足の下に足を入れたから悪いのだという返事がかえってくる。昔はよくいわれたものだ。そんなことは現実にはないが、自己否定の文明の下に育った日本人が外国で連発する言葉は、アイ・アム・ソリーとイエスである。それに比べて確かに欧米人はアイ・アム・ソリーとはめったに言わない。

戦後日本の教育では、はつきりと自分の意見を言える子供の教育を最大の目標においた。それほどに日本の子供ははにかみやで、自分の意見をなかなか言おうとはしない。そうした傾向は、昔からの自己否定の文明の伝統がより強く残っている田舎の子供に多い。これに対し、

欧米の子供たちは、はるかに堂々として自分の意見を主張する。

自己否定の文明は自らの小ささを認識することから出発するのに対し、自己肯定の文明は自らの存在の実感、自らの大きさを認識することから出発するといつてよいであろう。自分が思うからこそこの世は存在するのだ。自分がなければこの世は存在しないという自己肯定の文明はまたきわめて人間中心の文明である。世界は宇宙は大自然は自己としての人間のために存在すると考える。

もちろんそこで自己をみつめる厳しい神の目が存在した。その神は唯一絶対で、自己否定の神々以上にきびしく、厳格な神であり、時には神が人間をしつとすることさえあった。自己はその神との間に契約を結び、自らを律する必要があった。

この唯一絶対の神は当初はやはり、自己否定の文明と同じく、森や大海原や大地の中にいた。イエス・キリストはこういっている「石を割ってみろ、木を割ってみろ、そこに私はいる」と。しかし、いつしかこのイエス

の教えは人間中心主義の抬頭の中で、自己肯定の文明の中から失なわれ、ついに「我思う故に我あり」という人間の傲慢の極限の思想にいたるのである。そして、自己肯定の文明の下では、人々は森の中から見つめる神の目、大海原のかなたから見つめる神の目を意識することをしなくなってしまった。

西洋においては、我が思うことが全てであった。しかし、東洋においては我思うことは全てではない。我思うことはほんの小さなことがらにすぎず、この世にはもつと巨大な我を見つめる目が存在する。こう考えるのが東洋の思想なのである。

五、おちこぼれ型の天才

若き日の空海や最澄、あるいは日蓮や親鸞が、当時の世間的栄達の道を踏みはずしたおちこぼれであったことは確実である。強い自己否定に陥り、その精神の苦悩と闘う中で、新しい宗教を創造したのである。

もし、彼らがおちこぼれることなく、世間的栄達を達成していたなら、天台宗も、真言宗も、日蓮宗も浄土真

宗も生れなかったにちがいない。

そして、自己否定の闇の中でもがき苦しむ彼らを救ったのは日本の森であり、日本の海であった。自己否定は日本人が古代以来持ちつづける文明の本質であった。その文明の本質いや日本人の本性を日本の森や海の中で発見した時、彼らは悟りを開いたにちがいない。自己否定こそまさに日本人のアイデンティティーだったのである。宗教者の中で、もし自己否定など体験したことがない人がリーダーとなっていたら、その宗教はにせものである。

戦後五十年間、日本は自己肯定型の文明を理想にしてきた。したがって学校教育でも、はつきりと自分の意見を言うことができる自己肯定型の秀才を育成することに全力が注がれた。そして、ついに自己肯定型の文明に追いつき、豊かさを手に入れた。なのに、この心の空虚さは何なのか。それは、自己否定型の文明に立脚した日本人の魂がそれと乖離した自己肯定の文明の中でうずくめるのである。

本来の文明の本質とは異質の道をひた走りに走ってきた

た今、豊かさを手にした今、その文明の乖離が人々の心に空虚さをもたらしたのである。だから、二十一世紀の日本のヴィジョンがみえない。しかも、正しい解答のある問題のみをいかに早く、いかに正しく解くかの訓練をつんできた問題解決型の秀才にとっては、これまで誰一人として正しい解答を出したことのない地球環境問題や人口爆発など二十一世紀に我々をまっついている難問を解くことは、かならずしも得意とするところではない。

二十一世紀の人づくりの時代に、日本はまったく新しいレールを、未知の大海にむかつて、何の参考書もなく独自の力で敷いていかなければならないのである。その時に必要な人材とは、既存のレールに適合した問題解決型の秀才ではなく、むしろおちこぼれ型の天才なのではあるまいか。

秀才は少ないがおちこぼれは多い。そんなおちこぼれの中に、二十一世紀を切り開く能力をそなえた若者を発見し、育成していくことが、日本の各界のリーダーたちの責務ではないかと思うのである。

もちろん、いくら天才的な才能があつたとしても、そ

の才能を見出してくれるよきリーダーがいなければ、その才能も花開くことなくち果てる。最澄が桓武天皇に見出され、空海が嵯峨天皇に見出されたように、おちこぼれ型の天才をこの世に送り出すリーダーの役目もまた重要である。

日本丸が荒海の中で航路を見失って沈没しないために、空海が「鎮護国家」を説き、日蓮が「立正安国論」を提示したように、宗教家もこの国の未来に対し、真剣に模索し、新たなヴィジョンを提示しなければならぬ時代にあたいたったと思うのである。

(やすだよしのり・国際日本文化研究センター教授)